

第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

丈夫な杖

大阪府 大阪市立鯉江中学校 一学年

柳井 あずみ

「私は生きている――」改めて、今、そう感じています。

人間なら必ず母親のお腹の中から産まれてきます。大抵の赤ちゃんの頭は下の方を向いています。私の場合は頭が上の方を向いたままお腹の中にいた、いわゆる逆子の状態だったそうです。母は私を通常通りに産むことが困難になったため、帝王切開を決意したそうです。この話は、母から何回も聞いていてすでに知っていたのですが、よく考えてみれば、とても大変だったのではないかと思えます。

母は、

「あなたを産むために、保険に入ったのよ。」

と教えてくれました。私は保険というものが何なのかさっぱりわかりませんでした。

「保険に入っただけでね、治療費とか生活費とかのお金の心配をしなくてよくなったの。ほんとに助かったな。」

と母の安心した言葉。それを聞いて、保険が本当に「不安」を「安心」に変えてくれたんだと思いました。母は、私を出産するときだけでなく、弟を出産するときも帝王切開の手術を経験したから、そういうのもなおさらです。

おかげで、こうして元気に産まれてきた私ですが、いつか母と同じ経験をするかもしれません。「安心できる存在」である保険のよさを知って、少し元気になったので、母に聞いてみました。

「ねえ、私も保険に入っているの？」

「うん、入ってるよ。」

私は、保険に入るといふことは、この先の人生をどう歩むかを決めるようなものだと思います。母も経験したように、治療費が必要になった時もお金の心配をしなくて済むし、「もしも」のときに備えておくことは、とても重要なことです。

私には「将来の夢」があります。もちろん周りの人も同じです。なのに、病気やケガによる出費におしつぶされて充実した人生を過ごすことができない、これほどもったいないことはありません。せつかく親から授かった「命」なのだから、そして「たった一度きりの

第55回中学生作文コンクール

人生“なのだから、精いっぱい生き生きと過ごしたいです。
保険は、“危険”という石につまづいてしまったときの“杖”です。
たとえ転びそうになっても、丈夫な杖があれば、転ばない。あるいは転んでもすぐに立ち上がることができる。そんな“丈夫な杖”“保険”を、私は大切なものだと考えています。